【海外留学レポート】

意志あるところに道は開ける

-留学を通して得られた人生経験-

Where There's a Will, There's a Way.

英国ロンドン大学シティ校卒業 （金融ジャーナリズム修士号） **瀬口 美由貴**

SEGUCHI Miyuki

(Graduated from City, University of London, with a Master's degree in Financial Journalism)

キーワード：イギリス、正規留学

はじめに

私は、岐阜県内の高校を卒業後、18 歳で渡英した。スコットランドの東海岸に位置するセントアンドリュース大学の学部進学ファンデーションプログラムで学び、その後、イングランドのオックスフォード・ブルックス大学で英語と言語学の学士号、ロンドン大学シティ校で金融ジャーナリズムの修士号を取得した。

留学を通して得られたものは数えきれない。日本という慣れ親しんだ環境から飛び出して英語を習得したことで活躍できる世界が広がった。異なる文化的背景を持つ人との出会いを通して視野を広げ、様々な考え方を受け入れられるようになった。そして、こうして拡大した可能性のなかから、目標を見つけ出し、意志を持って行動することで道を切り開くことを学んだ。これらの経験は、その後の人生を生きるための土台となっており、自分自身の自信につながっている。

これまでに、光栄にも、日本学生支援機構の海外留学フェアをはじめ、多くの留学関連イベントに協力させて頂く機会を頂き、海外留学を志す学生や中高生、その親御さんから多数の質問や相談を受けてきた。このレポートを通して私自身の留学体験を紹介させて頂くことで、留学を考えている皆さんの不安や疑問が少しでも解消され、次の一歩を踏み出すきっかけを作ることができたら心より嬉しく思う。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

イギリスの首都・国際的な都市ロンドン

留学という選択

幼いときから異文化や外国に関する興味や関心があり、海外生活を通して自分自身の可能性を広げてみたいという好奇心は人一倍強かった。小学校の頃に英会話スクールに通い、高校では英語部に所属し、異国の人とコミュニケーションをとることに楽しさを覚えた。ただ、渡英するまでに英語圏を訪れた経験はなく、英語力に自信があったわけでもなかった。そのため、高校在籍時に海外の大学への正規留学を決めたことは大胆な選択だったと思う。幸運なことに、勇気を持って私の意志を尊重してくれ、学生生活を通して精神的にも金銭的にもサポートをしてくれた両親の存在があった。この場を借りて両親へ感謝の意を伝えたいとともに、このような家族からのサポートは実りある留学を実現するために重要な要素であることを強調しておきたい。

留学先を決めるにあたっては、日本の予備校が経営していた留学支援エージェントを利用した。アメリカやオーストラリアという選択肢もあったが、歴史や文化に興味があった私は大きくためらうことなくイギリスを選択した。そのエージェントを利用する特典として提携大学のファンデーションプログラムを修了すればエスカレーター式に学部進学できる制度があり、オックスフォードやケンブリッジに次ぐ歴史を持ち、質の高い教育や研究で評価の高いセントアンドリュース大学で学ぶことを決めた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

はじめての渡英

高校卒業後、渡英するまでの 10 週間で事前研修に参加し、基本的な英会話をはじめ、西洋の文化や慣習、イギリスの地理について勉強した。研修を通して、ともにイギリス留学をめざす仲間と出会い、悩みを共有しながら励まし合った。

2003 年 7 月、生まれて初めての長距離フライトを経験し、渡英した日のことは今でも鮮明に覚えている。十数人の仲間とともに、成田空港を午前中に出発し、ロンドン・ヒースロー空港を経由し、エディンバラ空港へ。そこからマイクロバスに乗り換え、セントアンドリュースにある大学寮に到着したときはまだ明るかった。夏のセントアンドリュースは夜 10 時頃まで明るいということもカルチャーショックだったが、見るものすべてが新鮮で映画『ハリーポッター』シリーズに登場しそうな風景が目の前に広がっていたというのが第一印象だった。

夏の間は、本格的な学部進学ファンデーションプログラムが始まる前の準備コースだったが、英語を英語で学ぶというイギリスでの学習は日本でこれまで学んでいた英語とは全く異なるものに感じられ、単語をつなぎ合わせて文章にして伝えることができるようになるまでには数か月の期間を要した。一緒に渡英した仲間のなかには幼少期に海外で生活していたり、海外旅行経験が多く英語力に自信があったりする学生がほとんどで、最初は授業のなかで発言することさえもできなかった。

英語圏での留学生活の難しさは授業だけではなく、寮に戻っても、週末になっても英語でのコミュニケーションから逃れられないことだ。英語力を向上させるためには最も適した環境である一方、はじめて家族と離れ、異国の地で暮らし、英語を使うことに慣れていなかった私にとって、渡英してからの数か月は本当に辛い時期だった。

困難を乗り越える

この困難を乗り越えるために、私は、日本人以外の人と英語を話す機会をできる限り作ることにした。自分から話しかけるには大きな勇気が必要だったため、相手に話しかけやすいと思われる雰囲気を出すことを意識して常に笑顔でいることを心掛けた。休み時間になると、何かと話題を見つけて職員室に出かけては先生や事務のスタッフと話した。また、夏の間に短期間の英語習得プログラムを受講していたイタリア人やスペイン人のグループと積極的に交流した。授業後には一緒に食事をしながら歓談し、週末には近郊の街へ日帰り旅行をしたりして友情関係を築くことで、英語力を楽しく上達することができただけではなく、英語圏以外の国の文化についても理解を深めることができた。

夏が終わり、大学の新学期が始まると、イギリス人や英語圏の学生が多く暮らす、3 食付きの学生寮で生活し、現地の人が話す生きた英語や日常会話、イギリスの文化や慣習についても徐々に慣れていった。

学部進学ファンデーションプログラムでは、韓国や中国、台湾など他のアジア諸国からの学生とと

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

もに、学部入学後に専門的な知識を学ぶために必要なスピーキングやリスニングに加えて、イギリスの大学の授業に必須のプレゼンテーションや、授業の板書スキルを学ぶノートテーキング、エッセイライティングなど実践的な内容を学んだ。

週末や長期休暇の際には、日本人の仲間や外国人の友達とイングランド北部をはじめ、エディンバラやグラスゴーなどのスコットランドの都市へ出かけ、歴史的建造物を見学し美術館や博物館を訪れるなかでイギリスの歴史や文化に関する見識を広げた。

留学中はスコットランド名物バグパイプの音色に癒された

オックスフォード

英語でのコミュニケーションに慣れてくると、進学先の選択肢としてイングランドの大学を希望するようになった。数年間という大学生活を過ごすのであれば、都市からのアクセスが良く過ごしやすい場所が良いと考えたからだ。いくつかの候補先を検討したが、キャンパス見学のために訪れたオックスフォードの街は大きすぎない規模で、歴史や自然を感じられ、理想的な環境だった。市内からも遠くない距離にメインキャンパスを構えるオックスフォード・ブルックス大学は、専攻科目が充実しており、この大学への進学をめざすようになった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

美しい自然と歴史的建造物が融合するオックスフォード

世界中から集まった学生と観光客らで賑わう

私の場合、セントアンドリュース大学に進学する場合は特別な試験を受けなくても入学することが可能だったが、それ以外の大学に進学するには学部進学ファンデーションプログラムを修了し、IELTS 試験で一定の点数以上を取得することが必須条件だった。IELTS 試験はリーディング力やリスニング力のほかに、スピーキングやライティングの能力を含めた総合的な英語力を測るテストで、英語力の強化が求められた。一緒に渡英した仲間の多くはセントアンドリュース大学に進学することを決めるなか、私は、IELTS の模擬テストを何度も繰り返し行い、毎日ラジオを聴き、放課後も週末も英語力向上のために努力し続けた。

その結果、無事に志望大学への進学が叶い、オックスフォードでの学生生活を始めた。英語を母国語とするイギリス人の学生のなかで授業についていくためには、課題の提出であっても試験勉強であっても、常に彼らの何倍もの努力をしなければいけない環境だった。ただ、この頃までには、英語でのコミュニケーションは不自由ないものになっていたし、現地の暮らしにも慣れていたのでイギリス

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

生活を満喫できるようになっていた。

勉強の合間には、オックスフォードの中心街にある土産物店でアルバイトをしていた。少しでも生活費の足しになればと始めたアルバイトだったが、大学以外で現地の人々と交流しながらイギリスの職場環境や文化、慣習など多くのことを経験する良い機会となった。また、週末や長期休暇には、電車や格安航空会社（LCC）を利用してイギリス国内はもちろん、欧州各地を旅行した。世界的に有名な観光名所を訪れ、芸術作品や演劇、舞台を鑑賞する機会にも恵まれた。

卒業後の進路

卒業が近づくにつれ、四年間という期間をイギリスで過ごすなかで自分自身の故郷である日本をより良く知り、その経験をもとにグローバルな舞台で働きたいと考えるようになっていた。ただ、イギリスにいながら日本を拠点とする企業への就職活動を行うのは難しい。私が卒業した頃は通年採用をしている企業も多くなかったため、日本に帰国してから東京で開催された海外大学の卒業生向けキャリアフォーラムに参加したり、インターネットでリサーチしてそのタイミングで募集のある仕事に応募したりするしかなく、出遅れての就職活動だった。

大学では英語の言語学を学んでおり、そのなかでも新聞やラジオ番組から書き言葉や会話の分析をする授業が好きだったことがきっかけとなり報道機関での仕事に興味を持っていた。そんななか、東京を拠点とする航空旅行業界紙が英語を話せる記者を募集していることを知り、就職につながった。

私の仕事は海外の航空会社をはじめ、外国の政府観光局や外資系ホテルの経営者を取材したり、海外のデスティネーションを視察したりして、記事にまとめることだった。本国からＣＥＯらが来日して開いた記者会見に出席したり、各国の旅行業界関係者の個別インタビューを行ったりするなかで、英語を使用して外国人幹部を取材する機会も多かった。

数年経った頃、ある大きな記者会見で、金融や経済ニュースを専門に扱う外資系の通信社や、米国や英国を代表する経済紙の記者と同席し一緒に取材する機会を得た。私の隣に座っていた記者が書いた記事はトップニュースとして世界中に伝えられ、国際的な報道機関だからこそ生み出せる大きな影響力を感じた。それ以来、国際的な報道機関の英語で書ける記者になることをめざすようになった。

二回目の留学

それからは、この目標を実現するためにひたすら行動した。知り合いになった外資系通信社や新聞社の記者から、英語のネイティブでない日本人が入社することは極めて狭き門ではあるが、入社する社員は大抵ジャーナリズムの修士号を持っていると聞き、大学院へ進学することを決めた。候補となる大学をリサーチし、その分野で世界的に評判が高く、金融ジャーナリズムの修士課程を新設予定だった、シティ大学ロンドン校を見つけた。入学願書を提出する前に渡英してキャンパス見学をするこ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

とは叶わなかったため、日本で開催された留学フェアに参加し、希望する修士課程プログラムやロンドンでの生活について大学の担当者に質問し疑問点や不安なことを一つずつ解消していった。大学の担当者とはその後も定期的にコミュニケーションをとり、スムーズに大学生活が送れるように準備を整えた。

何も分からない状況で渡英した一回目の留学と比べると、現地での生活環境や留学に備えるための心構えはできていた。ただ、大学院卒業後に明確な目標があったため、卒業後のキャリアにつながりそうな人脈を広げたり、ロンドン滞在中に職務体験ができそうな報道機関や金融機関を探したりして、一回目の留学よりも入念な準備を行った。

また、希望する修士課程プログラムへの入学にあたっては、イギリス国内の大学卒業証明書を持っていても、IELTS 試験で大学入学時よりも高い点数を取得し、与えられたテーマに関する記事を提出し、面接に合格することが求められた。フルタイムの仕事の合間に勉強し、準備を整えることは大変だったが、そうした努力の甲斐があり、金融ジャーナリズム修士課程プログラムの一期生に選ばれた。

金融ジャーナリズム修士課程をともに学んだ仲間たち（右から 2 番目が筆者）

ロンドンでの生活

ロンドンでは、世界中から集まった 12 人の学生とともに学ぶことになった。彼らの国籍はイギリス以外に、アイルランド、カナダ、ハンガリー、ケニア、インド、中国と幅広く、みな年齢も文化的背景も異なり、英語を母国語としていない学生は私を含めて数人だった。また、その多くは世界を代表する金融機関や報道機関での勤務経験を持っていた。彼らとともに切磋琢磨しながら世界経済をはじめとした様々な話題について議論を重ねた日々は、その後、多くの国際的な職場でキャリアを積むなかでも大いに役立った。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

この修士課程プログラムでは10か月という短期間で経済分野の専門記者となるために求められる金融やビジネスの基礎知識を身に付けるだけではなく、取材や記事執筆をはじめ、テレビやラジオの番組制作、ブログの運営、ソーシャルメディアの活用など多くの実践的な課題が与えられた。平日 9 時～17 時は授業に出席し、家に帰っても週末もずっと勉強する忙しい毎日を過ごした。

幸いにも、週一程度の頻度でフィールドワークがあり、イングランド銀行などロンドンの金融経済拠点を訪問してその道のプロから話を聞いたり、BBC やロイター通信、エコノミスト・グループなどの報道機関の本社を見学したりする機会には恵まれた。長期休暇中にはフィナンシャル・タイムズグループの投資情報専門紙でインターンシップを経験し、正社員の記者同様に取材を行い、記事を執筆し、署名入りの記事掲載までつなげることもできた。この頃、プライベートな時間はほとんどなかったが、何ものにも代えがたい価値のある経験ができた日々は充実していた。

卒業までの期間が残りわずかになると、卒業プロジェクトを進めながら最後の試験勉強をする一方、興味のある仕事を見つけては応募し、就職活動を進めた。イギリスで働くことも考えたが、最終的には、世界的な通信社の東京オフィスから仕事のオファーを頂き、日本に戻ることに決めた。

インターンシップでお世話になったフィナンシャル・タイムズ本社にて

留学を終えて

東京に戻ってからは、希望していた世界を代表する通信社や新聞社で英文記者として働き、英語ニュース番組を放送するテレビ局での仕事も経験した。その後も目標を見つけては意志を貫き実現に向

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

かって努力する人生を歩んでいる。繰り返しになるが、留学を通して得られたものは数えきれない。自分自身の限界まで挑戦し、困難を乗り越えた先に広がる世界を知った。数多くの素晴らしい出会いを経験し、支えられ励まし合い、感謝する喜びを知った。自分を見つめる時間を経て、自身の成長を実感することができた。これらがあるからこそ、いまの私がいて、いまの人生がある。

新たな一歩を踏み出すことは誰でも不安なことだが、少しでも留学に興味を持っているのであれば勇気を持って進んでほしい。留学を終えたとき、いま考えているよりもはるかに大きいことを成し遂げられる可能性を持っていることに気付けるはずだ。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.